

日本教育社会学会第 77 回年次研究大会トラベルグラント報告書

公開日：2025 年 12 月 12 日

公表者：一般社団法人 日本教育社会学会 事務局

朱瑩（東京大学大学院）

この度、辺源（早稲田大学大学院）との共同研究「大学院学習生活への適応を支える非正規教育の役割——文系中国人留学生の進学塾経験に着目して」を、代表者として部会 II-5「進路と教育（2）」にて発表を行いました。同じセッションの他の発表者はもちろん、フロアから多くの質疑をいただき、この研究の価値と問題点を再び認識するようになりました。発表後、同じテーマに興味を感じる研究者からも声かけられて、自分たちが見逃した英語圏の「影の教育」に関する膨大な先行研究の蓄積についてご指摘いただき、この研究を日本や中国の教育社会学研究のみならず、よりグローバルな文脈での位置づけがさらに明確になりました。

翌日は IV-1 「グローバリゼーションと教育」で、学校外教育、マレーシアの音楽教育、在日のネパール人が受ける教育とネパールから教育を通しての国際移動に関する発表を聞きました。各研究が扱っている地域がそれぞれですが、公的な学校教育以外の教育が現代社会においてどのような意味を有しているかという問題意識は、共通していると理解しています。研究している分野は異なるものの、発表後それぞれの研究について、自分の経験や知っている理論知識に基づいて、そのうちの 3 つの発表に対して質問しました。セッション修了後も 1 時間ほど自分たちが研究で悩んでいることについて話し合い、意見が交換できて充実な時間を過ごしたと思います。

甄卓榮（筑波大学大学院）

日本語での学会発表は初めてでしたが、自分の研究成果を教育社会学会の研究者たちに共有できたことをとても嬉しく思いました。

初日は若手研究者の交流会に参加し、幅広い問題関心をもつ方々と知り合い、お互いの研究内容や悩みを語り合う中で、自然と研究者コミュニティの一員になれたような気がしました。教育社会学では研究テーマや手法の自由度が高く、一人ひとりの個性が研究に生かされていることを改めて感じました。

二日目には、「高校生の国家意識」という自分の研究テーマについて発表しました。

従来の政治的・社会化的研究に見られる「政治意識」を中心とする若者研究とは異なり、より深い思想的・側面や制度そのものの認識に着目する「国家意識」研究の必要性を提示し、その実証的成果を報告しました。量的研究の初心者として不安もありましたが、先生方から多くのご意見やご指摘をいただき、自分の研究の意義を再認識することができました。同じ分科会の先生からは親切にご助言もいただき、大変ありがとうございました。

三日目のシンポジウムでは、社会学研究の規範的意義について深く考える貴重な機会となりました。私の研究は社会学と教育学の中間に位置するため、経験的側面と規範的側面を併せ持っていますが、このシンポジウムを通じて自身の研究の立ち位置を改めて見つめ直すことができ、とても有益でした。

「茨城」から出発し、高速を降りた先がなんと「茨木」でした。この長い旅をご支援いただき、誠にありがとうございました。

黒岩薫（お茶の水女子大学大学院）

この度はトラベルグラントに採択いただき、日本教育社会学会第77回年次研究大会において「保育者の性別とジェンダー—保育・幼児教育施設における実践・意識との関連—」という題目で発表する機会をいただきました。

これまでの研究活動はコロナ禍や出産の影響を受けてきたこともあり、対面での学会発表は今回が初めてでした。大変緊張いたしましたが、複数の先生方より貴重なご助言を賜り、対面参加の意義をあらためて実感いたしました。

今回の発表では、全国の幼児教育施設を対象としたオンラインでの質問紙調査データを用い、保育者の性別によって生じる「トークニズム」という現象が現場の実践や教職員の意識とどのように関連するのか検討いたしました。設問のワーディングに対するご指摘や、園の形態や回答者の職種による交互作用の可能性、分析枠組みの再検討の必要性などについて、多くの貴重なコメントをいただきました。この場をお借りし、深く御礼申し上げます。

また、大会期間中は主に「ジェンダーと教育」部会に参加し、他の研究発表を拝聴することで、自身の研究とのつながりを多角的に捉える契機も得られました。

さらに、若手研究者交流会にも参加させていただきました。若手研究者と悩みを共有することで、今後のキャリア形成に前向きになれたことに加え、研究領域の近い方々と意見交換を行う貴重な機会を得ることができました。

対面参加ならではの学びと交流の機会をいただき、重ねて御礼申し上げます。

鶴下 韶（早稲田大学大学院）

この度は第 77 回年次研究大会トラベルグラン트に採択いただき、誠にありがとうございました。

年次研究大会では、「大学での学びと生涯教育」部会において、「学生時代の学習活動とその後の学習行動—『学び習慣』仮説の因果的検証に向けて—」というタイトルで報告させていただいたほか、「社会階層と教育(1)」部会では、陳炯楷さん（早稲田大学大学院）、川又亮さん（早稲田大学大学院）との共同研究である「中国の教育拡大と階層・再取得学歴：人生初期と成人後の機会格差」を報告させていただく機会も得ました（報告者：陳さん）。

今大会が初めての部会での報告ということもあり緊張しておりましたが、両報告ともに様々な先生方から貴重なコメントを頂戴することができました。その中で、報告させていただいた研究の課題と、それを踏まえて今後の論文化に向けてるべきことが明確になったように思います。この場をお借りしまして感謝申し上げます。

また、今大会では様々な先生方の報告を伺い、意見交換させていただくことができたのも大きな収穫でした。報告させていただいた部会の前後では、第一線で活躍される先生方と直接お話しさせていただいたほか、若手研究者交流会では、新たな研究につながるようなお話もすることができました。こうした収穫は、年次研究大会に参加させていただいたからこそ得られたものであると考えております。

今大会で得た学びを今後の研究活動に生かし、より一層精進してまいります。最後になりましたが、大会運営にご尽力くださったすべての皆様に深く感謝申し上げます。

付 郁（東北大学大学院）

この度は、日本教育社会学会第 76 回年次研究大会に参加し、研究発表を行う機会をいただき、さらにトラベルグラン트に採択していただきましたこと、心より感謝申し上げます。私の発表題目は「非認知能力と学力格差に関する実証研究—SES による異なるメカニズムに着目して—」であり、日本の子どもの生活と学びに関する親子調査のパネルデータを用いて、非認知能力と学力の関連性が SES によってどのように異なるかを明らかにすることを目的とした実証分析の結果を報告いたしました。

発表では、非認知能力の因子構造の妥当性、SES との交互作用をどの理論枠組で説明するか、また文化的文脈が成長型マインドセットの効果に影響する可能性など、

多面的な角度からご質問・ご助言をいただきました。特に、多重媒介分析の不十分に関するご指摘は、今後の分析設計をより精緻化するうえで大変重要な示唆となりました。

大会期間中は、他の部会の発表にも参加し、教育社会学における多様な研究方法や視点に触れ、自身の研究の位置づけを見つめ直す有意義な時間となりました。若手研究者交流会では、異なる大学・専門分野の院生や研究者と交流することができ、今後の研究活動において励みとなるつながりを得ることができました。

今回の学会参加を通じて得られた知見や助言は、現在取り組んでいる修士論文の改善に直結するものであり、今後の研究活動に確実に活かしていきたいと考えております。このような貴重な機会をいただきましたことに改めて深く御礼申し上げます。

以上